

2003年10月25日

メタ超心理学研究会（於明治大学）

研究報告

「共時性の意味論」

田中彰吾（昭和学院短期大学，心理学／哲学，shogo@valdes.titech.ac.jp）

今回の報告では、まず、[参考文献1](#)；C・G・ユングの提唱した共時性（synchronicity, シンクロニシティ）の理論が成立した歴史的経緯を、超心理学との関係から整理する。参照するのは、ユングが超心理学者ラインに宛てた書簡である。そして次に、[参考文献2](#)；ユングの共時性理論の不備を指摘し、それを一定の観点から補うことを試みる。ここで問題となるのは、共時性体験はそもそもいかにして成立するのか、またこれらの体験にはいかなる意味があるのか、ということである。

1．ユングとライン

共時性（シンクロニシティ）を提唱したC・G・ユングと、超心理学者J・B・ラインとの間には、長年に渡る書簡のやり取りが存在する。湯浅の編集によるユングの書簡集¹には、ユングからラインに宛てた九通の書簡（1934 - 1954年）が収められている。共時性理論が公にされたのが1952年のことであるから、ユングの考えはラインとの対話を通じて明確化されたと言える面がある²。

もともとラインは、彼の学問上の師であるW・マクドゥーガルから、間接的にユングのことを聞いていたようである。マクドゥーガルは20世紀初頭のヨーロッパに留学し、精神分析運動とも交流のあったアメリカの心理学者で、1920年にはイギリス心霊研究協会の会長を務めている。

二人の交流は、ラインがユング宛に自身の著作『超感覚的知覚』³を送ったことから始まった。ユングはラインの求めに応じて、みずからの体験した種々のP S I現象（PKやテレパシー的現象）について述べているが、これらを公表することにはきわめて消極的だった。「自分の体験を見世物にする気はまったくありません」⁴とユングは述べている。

書簡を読む限り、こうしたユングの消極的な態度には二つの理由があったと思われる。

；科学者からの誤解や偏見にさらされることを恐れていた。；当事、超心理学的現象をめぐるユング自身の理論的立場（後の共時性理論）が整備されておらず、説得力のある議論を展開できるとは考えていなかった。

2．ユングのP S I解釈

上記の書簡を検討することによって、ユングがどのような観点からP S I現象（およびラインの実験結果）を解釈していたかを明らかにすることができる。ユングのP S I解釈は、彼が後に提示することになる共時性理論の基礎的な考え方を示すものにもなっている。

その主要な点は、以下の三つに整理することができる。

(2-1) 無意識の関与

ユングは精神科医として心理療法に従事しており、その現場でしばしばP S Iと見られる現象に遭遇していたようである（その一部は弟子のA・ヤッフェが編集した『ユング自伝』⁵に収められている）。書簡でも、「我々は実際の臨床の場でも、テレパシーのような特異な現象に出会うことがしばしばあります」⁶と述べている。ユングの考えでは、心理臨床の現場とは、患者がみずからの無意識に向き合い、また治療者との対話を通じて、しだいに変容してゆく過程である（個性化）。このような過程でP S I現象がしばしば起こるとすれば、無意識のエネルギーがこれらに関与していると推測することができる。PKやESPは「無意識の引き起こすある種の特異な現象」⁷である。ユングによれば、これらは体験者が意識的に（意図的に）引き起こしているわけではなく、意識されていない心的過程の産物だということになる。

(2-2) 「時間と空間の相対性」という観点

テレパシー的体験においては、「ここ」に居ない他者の心理状態が把握されている。わたしが居る「ここ」という場所と、他者が居る「あそこ」という場所とのあいだにある隔たりが一時的に消滅していると仮定することができる。同様に、予知の体験においては、体験者が位置している「いま」という時間と、いまだ到来していない「以後」との隔たりが消滅していると考えられる。ユングはここから、「時間と空間の相対性」という考えに到達する。魂（Psyche） 無意識を含めた最広義での心 には、時間および空間というカテゴリーに従わない側面がある。「ESPの最も重要な点は、それが時間要素と同様、空間要素をも相対化するという点にある」⁸とユングは述べている。日常世界（意識が直接的に経験している世界）における時間・空間は絶対的に見えるが、無意識の深みにおいては時間も空間も相対的であり、時間的・空間的な隔たりは存在しないかのように見える。なおユングは、前者をマクロ物理学的世界、後者をミクロ物理学的世界に対応するものと考えている。

(2-3) 情動的要因

偶発的に見られるESPの多くが、体験者に強い情動を引き起こすような深刻な状況で起こっていることにユングは着目している（例えば、知人が交通事故に遭遇するとか、家族が死に瀕しているといった状況である）。「ESPのごく自然なケースは、ある情緒的な環境下（事故・死・病気・危険等）で」⁹起こるものである。またある書簡では、ラインの諸実験における期待効果に触れて、「被験者の活発な関心が最高の重要性を持っている…ある種の情緒的条件は不可欠です」¹⁰とも述べている。要するに、危機的事態にまつわる切迫感、心理療法の最中に起こる情緒的葛藤の高まり、実験状況に対する期待・希望、といった情動的な要因がP S Iには付き物だとユングは考えていた。こうした情動的な要因が、P S Iの原因なのか結果なのかについては触れられていないが、P S Iが起こる時はそれに相関する情動の高まりが観察できるという考えである。

その他の論点としては、以下のようなものがある。

- ・ 書簡の中ではPKにほとんど触れていない 精神と物質の関係にはほとんど触れていない
- ・ ユングはラインの実験を基本的には支持していたが、理論的な側面においてある種の違和も感じていた この点が「非因果性」という観点につながっていく

3. 共時性理論の展開

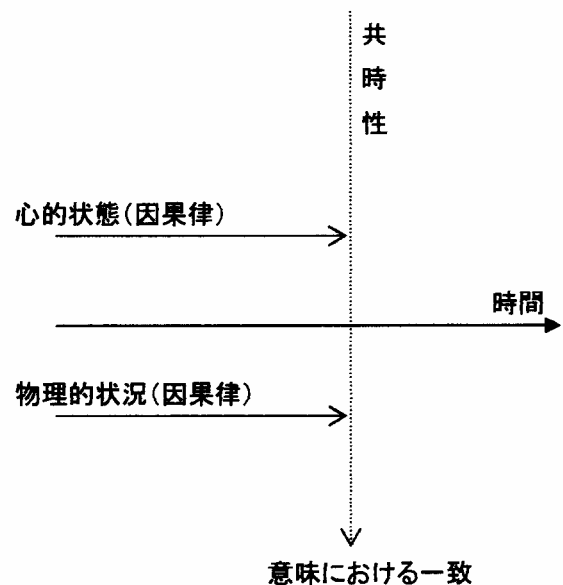
ユングが1952年に発表した共時性理論は、以上の三点をユング心理学の観点から考察・展開した内容となっている。理論の検討に入る前に、参考として、あまり知られていない共時性体験の事例をひとつ挙げておく。

一七六五年の七月二二日から二三日にかけての夜一二時、寝室にいたわたしの妻が、わたしの書斎になっている上階の部屋で物音を耳にする。それはだれかが、どっしりとした足どりで、長いあいだ、行ったり来たりする音だった。妻はわたしを起こす。わたしもその音をはっきり聞く。わたしは、だれもその部屋にいないこと、扉にはたしかに鍵がかかっていることを知っていたし、鍵はわたしの足元にあった。

数日後、わたしは、わたしの特別の友人でこの上もない親友だったカール・クレルク長官が七月二二日の夜九時に逝去したという知らせを受け取る。実際あの足音は、彼の足音にそっくりだった。だから、もしストックホルムであの音を聞いていれば、その音で彼だということがわかっただろう。しかしそのときわたしは、ストックホルムから六マイルも離れたハマルビューの自分の屋敷にいたのだった。¹¹

これは近代植物学の祖と言われるリンネの遺稿に記されている体験である（この遺稿には他にも共時性体験と思われる記述が多数ある）。リンネはこの体験において、独特の仕方で親友の死に巻き込まれている。リンネの聞いた音が「幻聴」であるかどうか定かではないが、ともかく、彼の聞いたという足音は、亡くなった親友の足音と偶然にも一致していた（と彼は確信している）。いわゆる「虫の知らせ」である。

このように、共時性体験とは「意味のある偶然の一致（meaningful coincidence）」の諸体験のことである。ユングは「ある一定の心の状態がそのときの主体の状態に意味深く対応するよう見える一つあるいはそれ以上の外的事象と同時的に生起すること」¹²と共時性を定義する。つまり、イメージ・感情・思考といった一定の心的状態



共時性の概念図

・内容が、外界に起こる物理的事象と意味深く符合する。ユングの考えでは、PK、予知、テレパシー、遠隔視といったPSI現象はすべて共時性に包括しうるものであり、共時性はPSIより広い概念である。

(3-1) 非因果性

共時性は、別名を「非因果的連関の原理」と言う（これは共時性論文の副題ともなっている）。ユングは共時性の現象を、どこかに明確な原因を発見しうるものとは考えなかった。偶然の現象ではあるが未知の法則性がそこにはあるかもしれない、との仮定に立っている。

非因果性の主張の有力な根拠として挙げられているのが、透視は距離の影響を受けない、という実験結果である¹³。ラインの実験では、透視は距離の大きさに関わらず有意な結果を示している¹⁴。もしもESPがエネルギー現象であるとするなら、距離の大きさに比例してESPの成功度も下がると考えられるが、実験結果はそれを支持していない。ここからユングは、ESPが非エネルギー的現象であると考え、原因となるエネルギーが存在しない非因果的現象であると言うのである。

このような考えの延長に、心的表象と物理的事象との非因果的連関をユングは想定する。例えば交通事故の予知夢において、「事故の夢を見たこと」（心的表象）は「事故が起こったこと」（物理的事象）の原因ではないし、逆に、未来の交通事故は、現在の夢の原因ではない、と考えられる。体験者の心が未知の現実に影響を与えるのではないし、逆に未知の現実が体験者の心に影響を与えるのでもない。

リニアな因果性ではなく、「相対的な同時性」をユングは主張する。つまり、「ここ」と「あそこ」の空間的隔たり、「いま」と「以後」との時間的隔たりが一時的に消失するということである。共時性の体験者は、遠方で起こっていることを「ここ」で起こっているかのように、あるいは、未来に起こることを「いま」起こっているかのように知覚している、とユングは考える（2-2 参照）。

(3-2) 集合的無意識と元型の理論

先に無意識の関与について述べたが（2-1）、ここで言う無意識とはいわゆる集合的無意識（collective unconscious）のことである。ユングは、フロイトの提唱した無意識を「個人的無意識」と呼び、それより下層に集合的無意識の存在を仮定した。集合的無意識は、個人的な心の領域を越えており、人間という種に固有の諸経験のパターンが保存されている、いわば「人類史的無意識」の領域である。集合的無意識は、これらの経験に対応する数多くの元型によって構成されている。

集合的無意識および元型の理論は、もともと膨大な神話研究から導かれたものである。元型は、人間の精神に生得的に備わっており、定型的なパターンの夢・物語・神話などを生み出す普遍的な構造だと考えられていた（例えば、怪物と対決して人間界に宝物を持ち帰る英雄神話は、「英雄元型」のはたらきによるものである、等）。

しかしユングは共時性現象を説明するにあたり 共時性論文では明示的に指摘されていないが この点に理論的な変更を加えたものと思われる。集合的無意識は、心の内部（または内的世界）には閉じておらず、内的世界と外的世界にまたがって広がる一種の場（フィールド）として、また元型は、人間の心を含めて広がる自然界の場を組織化する要

因として、とらえ直された。心を含めた広義の自然こそ集合的無意識であり、心的世界と物理的世界を非因果的に組織化（ユング心理学の用語では「布置」constellation）するのが元型である。われわれが共時性やP S Iとして認識している現象は、元型による自然の組織化の現われである。

なお、集合的無意識のレベルで元型が活発化するとき、個人の心には強い感情（情動）が起こってくる。多くのP S I現象において情動が相関関係を持っているのはこのためである（2-3 参照）

(3-3) ウヌス・ムンドゥス

ユングが共時性理論を構想した根本には、「次元」という発想がある。意識が構成している日常的世界においては、物体や物理的世界はあたかも客観的に存在しているように見えるし、存在者すべてを含みこむ三次元の空間、不可逆的に流れていく直線的な時間が存在しているように見える。しかし、無意識の根底に接近していくにつれて、内界と外界の区別は次第にあいまいなものとなり、時間と空間の隔たりも消滅していく。逆にここから見ると、われわれの生きている日常的世界はある超越的な次元によって取り囲まれており、この超越次元が日常的次元に向かって突破してくる瞬間を、われわれは共時性として経験しているということになる。ユングは晩年の錬金術研究の文脈で、このような超越次元、あるいは精神と物質の区別が消滅した究極的な世界のことを「ウヌス・ムンドゥス」*unus mundus*（ラテン語で「一なる世界」の意味）と呼んでいる¹⁵。ただし、ウヌス・ムンドゥスは何か実体性を帯びた世界ではない。われわれはウヌス・ムンドゥスをありのままの姿でイメージ化したり言語化したりすることはできない。それは直接には表象不可能である。

ユングは、共時性現象を説明するために、精神と物質の潜在的な一元性を仮定した。精神と物質の二元論に立って、前者が後者をP S I能力によって操作するという考えではなく、精神と物質は潜在的な次元において統一されており、その統一性が現象世界に現われるときに共時性が起こるのだという考えに立っていた。ユング自身の言葉を引用しておく。

経験的現実
は超越的背景の上に成り立っている...（中略）...ミクロ物理学といわゆる深層心理学の共通の背景は物質的でもあり心的でもあって、それゆえそのどちらでもなく、むしろ、その核心が超越的であるがゆえにたかだか暗示的なかたちでしか捉えることのできないような、ある第三のもの、ある中立的本性を有するものである。¹⁶

3 . 記号としての共時性体験

ユングの共時性理論は、現象を一貫して説明する整合性を備えている一方で、以下に挙げるようないくつかの問題点も見られる。

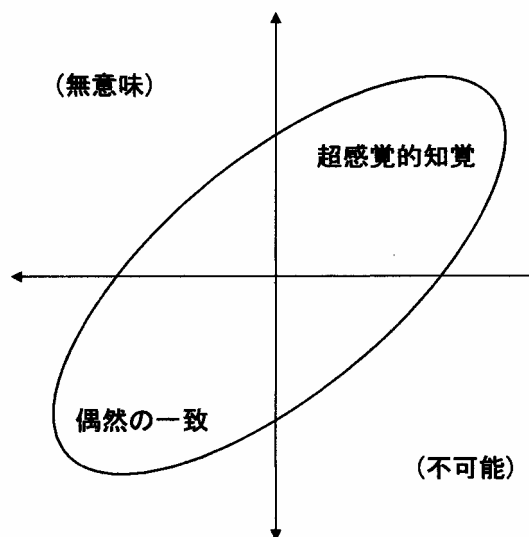
- ・ 非因果性が十分に証明されていない
- ・ 経験的現象が形而上学的に基礎づけられている
- ・ 共時性がいかにして「有意味」な偶然となるのか説明されていない

とりわけ問題なのが第三点である。もともと共時性理論は、「意味のある偶然の一致」の諸体験がいかにかんじられるのかを説明するものであった。にもかかわらずユングは、ここで言う「意味」が何であり、いかにかんじられるのか、ほとんど説明らしい説明を残していない。元型が活発にはたらくときに「意味のある偶然の一致」が起こり、元型の作用はわれわれにとって「意味」として現われてくる、という点が指摘されているだけである。共時性理論は、この点において補足されるべきであろう。

ユングが残している数少ない記述のなかに、「われわれは、意味を心的な過程ないし内容とする見方にあまりにも慣らされているので、意味が心の外部にも存在しうるなどと決して思い至ることはない」¹⁷という一文がある。意味のある偶然の一致の体験における「意味」とは、体験者による主観的な意味づけに還元できるものではなく、客観的な性質を持つものである、というのがユングの考えである。このようなユングの立場を、渡辺は批判的な意味合いを込めて「意味実在論」と呼んでいる¹⁸。

筆者は、この問題点について記号論的な観点からの整理を試みた¹⁹。体験としての共時性は、そこから多様な意味が生成してくるひとつの記号ととらえることができる。ここで言う記号とは、ソシュール言語学で言うシニフィアン（能記＝意味するもの）とシニフィエ（所記＝意味されるもの）の結合体のことである。共時性体験において、体験者は、複数の出来事のあいだに有意味な結びつきを見出す。例えば先のリンネの事例の場合、「誰かの足音らしき物音が聞こえた」ということと、「足音の主と思われる親友の死の知らせを受けた」ということが、リンネにおいて有意味に結びついている。ここで前者をシニフィアン、後者をシニフィエに対応するものと考えれば、共時性体験はまさにひとつの記号である。共時性体験を記号と見なす場合、シニフィアンは広義の心的表象（イメージ、夢、思考内容その他）であり、シニフィエは外界の出来事である。

このような観点のもとに多数の事例を検討すると、「意味のある偶然の一致」が成立するための条件が二つ存在することが明らかとなる。①シニフィアンとシニフィエの類似性。リンネの体験を例に取ると、リンネが聞いたという物音と、死んだ親友の足音とが類似したものでなければ、リンネはこの体験に「意味がある」とは考えなかったであろう。両者が一定の範囲において類似性を示しているからこそ「意味がある」と体験者には感じられる。②シニフィアンとシニフィエの近接性。リンネが物音を聞いた夜から、仮に5年経過した後に親友の死を知らされたとしても、リンネはこれを「偶然の一致 co-incidence」として受け止めることはできなかつたであろう。シニフ



共時性体験の整理（右に向かうほど類似性が高く、下に向かうほど近接性が高い）

イアンとシニフィエが時間的に近接していなければ、偶然の一致は成立しない。

個別の事例では、類似性、近接性というこれら二つの条件が互いに相補的なものとして現われる。シニフィアンとシニフィエの類似性が高い場合には、両者の時間的な近接性は低くても体験は成立する。逆にシニフィアンとシニフィエの近接性が高い場合には、両者の類似性は低くてもよい。もちろん、これら二つの条件に明確かつ客観的な基準があるわけではない。どこまでを類似性または近接性とみなすかは個々の体験者の主観に依存するが、しかし少なくとも、理論的にはこれら二つの基準を導くことができる。

したがって、偶然の一致に意味を見出すのは体験者の主観であると見なしてよいが、かといって、こうした意味づけに全く根拠がないとも言えない。「意味のある偶然の一致」は、類似性または近接性という出来事の構造に依拠して成立するからである。ユングが考えたように、客観的な意味が実在するとまでは言えないが、体験者の主観的な意味づけによってのみ共時性が成立しているわけではない。偶然の出来事を潜在的に規定する構造が存在すると考えるべきである。

4 . 共時性の意味論

それでは、類似性と近接性という条件によって成立する共時性体験には、結局のところいかなる意味があるのか。具体的な個々の共時性体験については体験者本人による多様な解釈がありうるけれども、そうした解釈そのものは、以下の二つの言語的（あるいはレトリック的）な構造によって規定されていると筆者は考える（正確には三つだが、ここでは煩雑な議論を避けるため二つに論点を絞る）²⁰。

以下、この点の説明のため、ユングが挙げたなかで最も有名な共時性の事例を挙げる。

私の事例は、双方 [ユングと患者] からの努力にもかかわらずどうしても心理学的に接近できないことが判明した、ある若い女性患者に関するものである。問題は、何でも彼女の方がよく知っていることにあった。優れた教育のおかげで、彼女はこの目的によく見合う武器を手にしていて、すなわち、幾何学的で非の打ち所のない現実概念を備えた、鋭く研がれたデカルト的合理主義がそれである。彼女の合理主義をもう少し人間的な分別によって和らげようと、何回か試みても実りがなかった後には、何か予期もしないような非合理なことが起こって、彼女が閉じ込められている知性のレトリックが壊れることを期待するしかなくなってしまっていた。こうしてある日、窓を背にして彼女の前に座り、彼女の雄弁ぶりに耳を傾けていたのである。その前夜、彼女は、誰かに黄金のスカラベ（ある高価な装飾品）を贈られるという印象深い夢を見ていた。彼女がまだこの夢を語り終えないうちに、何かが窓をとんとんとたたくような音がした。ふり返ると、かなり大きな昆虫が飛んできて窓ガラスにぶつかり、どう見ても暗い部屋の中に入って来ようとしていたのである。不思議なことに思われた。私はただちに窓を開け、中に飛び込んできた虫を空中で捕まえた。それは一匹のスカラバエイデ（セトニア・アウラータ）よく見かけるパラコガネムシで、その緑金の色合いが黄金のスカラベのそれに最も近いものだった。「これがあなたのスカラベですよ」と言って、私は患者にコガネムシを手渡した。この出来事によって彼女の合理主義には待望の穴が開き、理知的な抵抗の氷が砕

けたのであった。こうして治療は、満足すべき結果をもたらした。²¹

この体験に、「デカルト的合理主義」に「待望の穴」をうがつような意味があったのだとすれば、それは次の二点から構成されているだろう。

第一に、患者の見た夢と、診察室で起こった出来事が類似していたこと。言葉を換えると、診察室で起こった出来事は、前日に患者が見た夢を隠喩的（メタファー）に反映していたということ。患者の夢をそのまま映し出すかのように現実世界の出来事が起こった点に、この体験の第一の意味がある。外界の出来事が内界のあり方を反映する隠喩として現われれば、体験者の心に潜む問題はそこで否応なく増幅される。外界は内界の鏡となっている。

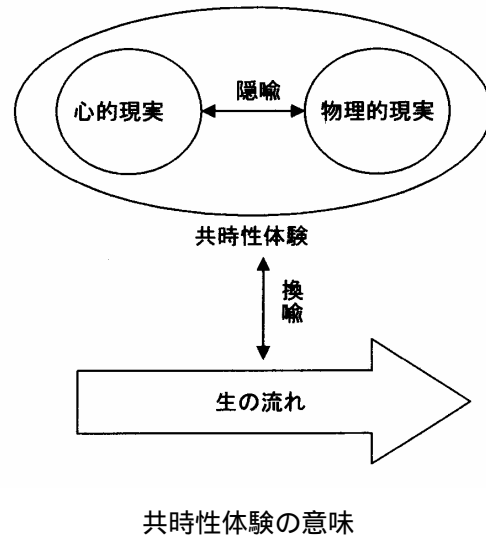
第二に、この共時性体験は、一連の治療が行き詰まりに差し掛かった状況で起こっている。患者がこれから変化していこうとする節目で起こっており、どこから来てどこへ向かうのかを示唆しているところがある。これは言い換えると、体験そのものが、患者の生の流れを指し示す換喩的な表現（メトニミー）となっているということである。この体験があったから患者が変化したのか、患者が変化する節目にあったからこの体験がおこったのか、それはどちらが正しいのかは分からない。いずれにせよ、この体験がそれ自体として、患者の生の流れを暗に示唆していたことに変わりはない。ここに第二の意味がある。

このように、共時性体験の意味は、隠喩および換喩という二つの言語的・レトリック的な構造によって規定されている。第一に、共時性体験にはシニフィアンとシニフィエという側面があり、両者の類似性によってある体験が共時性として成立する。外界の出来事は、体験者の心のあり方の隠喩として現われるということである。第二に、共時性体験は、体験者の生の流れを反映するかたちで起こる。ここでは、体験そのものが、生の流れを特徴的に示す記号となっている。共時性体験と生の流れとの関係は換喩的である。

まとめ

共時性は、心的表象と物理的事象とが、偶然にも意味深く対応する瞬間をとらえようとする概念である。だとすれば、共時性の理論は、心的現実と物理的現実の関係、ひいては想像力と現実との関係を明らかにするものでなければならない。ユングは、両者の非因果的な連関を想定し、心的現実にも物理的現実にも純粋には帰属しない第三の要因として元型を位置づけた。元型がはたらくとき、一方では心の内部にイメージが生み出され、他方ではそれに対応する物理的事象が引き起こされる。

筆者は、このような元型のはたらきが、体験者にとって意味として出現することに着目



し、それらの意味がいかにして構成されるのか、明らかにすることを試みた。想像力と現実が交差する領域では、意味を生み出している真の主体は心でも物でもない。無意味な出来事に人間が意味づけするのでもないし、物理的事象そのものの中に意味が実在しているわけでもない。両者を潜在的な次元において規定している構造こそ、意味を生み出す真の主体である。そしてこの構造は、多分に言語的なものである。

-
- 1 湯浅泰雄編訳『ユング超心理学書簡』白亜書房，一九九九年。
 - 2 湯浅泰雄によれば、共時性理論を構想する途上にあったユングに大きな影響を与えたのは、古代中国の易経、相対性理論や量子力学といった現代物理学の理論、ラインの超心理学、の三つである（『共時性とは何か』山王出版，一九八七年）。
 - 3 J. B. Rhine. *Extra-Sensory Perception*. Boston: Humphries, 1934.
 - 4 ライン宛，一九三五年五月二〇日付書簡
 - 5 A. Jaffé. (hrsg.) *Erinnerungen, Träume, Gedanken von C.G. Jung*. Zürich: Rascher Verlag, 1967. 邦訳『ユング自伝 1,2』河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳，みすず書房，一九七三年。
 - 6 ライン宛，一九四二年十一月五日付書簡
 - 7 ライン宛，一九三五年五月二〇日付書簡
 - 8 ライン宛，一九五三年九月二五日付書簡
 - 9 ライン宛，一九五三年二月一八日付書簡
 - 10 エンリケ・ブーテルマン宛，一九五六年七月の書簡
 - 11 カール・フォン・リンネ『神罰』小川さくえ訳，法政大学出版局，一九九五年。（一一二頁）
 - 12 C. G. Jung, *Gesammelte Werke* 8, § 850(以下 GW と略記，§ はパラグラフ番号) 邦訳『自然現象と心の構造 - 非因果的連関の原理』河合隼雄・村上陽一郎訳，海鳴社，一九七六年。（三四頁）
 - 13 Jung, GW8, § 840 (邦訳二四頁)
 - 14 笠原敏雄『超心理学読本』講談社，二〇〇〇年。（五九頁）
 - 15 Jung, GW14, § 759 邦訳『結合の神秘』池田紘一訳，人文書院，一九九五／二〇〇〇年。（第 卷三四一頁以下）
 - 16 Jung, GW14, § 768 (邦訳三四七頁)
 - 17 Jung, GW8, § 905 (邦訳八九頁)
 - 18 渡辺学『ユングにおける心と体験世界』春秋社，一九九一年。（一四九頁以下）
 - 19 田中彰吾『＜意味のある偶然の一致＞の現象学 - ユング理論の再検討を中心に』東京工業大学博士論文，二〇〇三年。（八三頁以下）
 - 20 田中彰吾，前掲書。（一〇一頁以下）
 - 21 Jung, GW 8, § 972 邦訳『共時性について』エラノス会議編『時の現象学』所収，平凡社，一九九一年（二九三頁）